

PART 02

子どもの弱視・斜視

乳幼児期にわかりにくい目の病気。

小さい子どもの目の代表的な疾患が弱視と斜視。3歳児検診で発見されることが多いので、周囲の大人が視力の発達に注意し、早めに対処することが肝心。

子どもの目は、生まれた時にはぼんやりと見えているだけで視力は定まっています。年齢とともに脳や身体

の機能が発達し、それに伴い、ものを見る機能も育ってきます。目の発達の途中段階で目の神経、脳などの機能に何らかの支障があると、視力に影響が出ます。子どもの目の病気で多いのが斜視と弱視で、「斜視は生後数カ月ごろから親や周りの大人が、『目の焦点が合わない』と気づくことがあります。

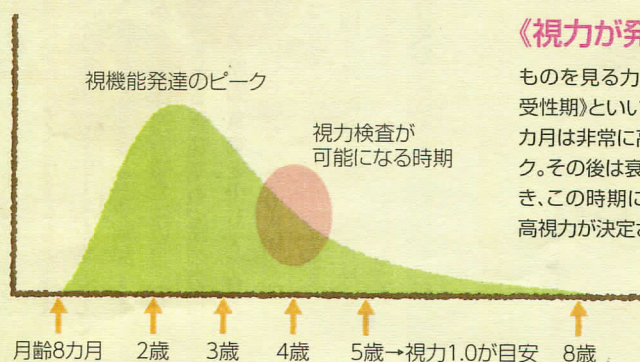
一方弱視の場合は、なかなか気づきにくく、3歳児検診で視力検査が行えるようになって初めて分かる場合も。乳幼児は生まれた時からの環境が当たり前になっており、本人が『見えにくい』と伝えることができないので、周囲の大人が注意深く見守ることが大切です」と、姫路市のツカザキ病院眼科医長の清水有紀子さんは話します。

日頃から子どもの行動に注意。

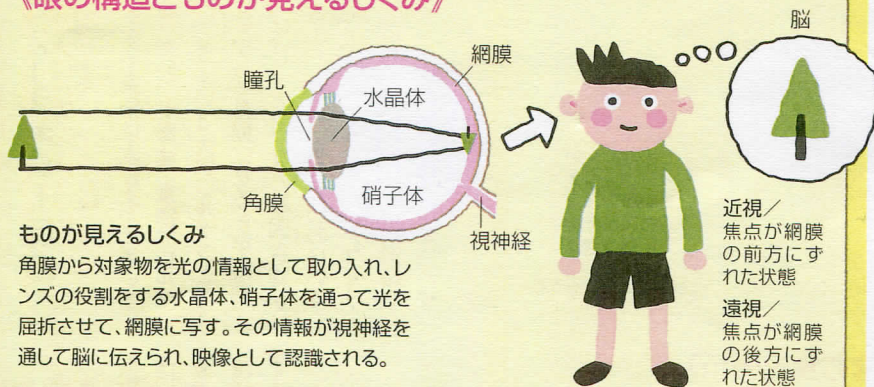
斜視とはものを見る時に、片方の目

《視力が発達する時期》

ものを見る力の成長期を《視覚感受性期》といい、生後1カ月から18カ月は非常に高く、2歳ごろがピーク。その後は衰えて8歳ごろまで続き、この時期にその後の人生の最高視力が決定される。



《眼の構造とものが見えるしくみ》



(教えていただきました)

ツカザキ病院 眼科医長
清水 有紀子 (しみず・ゆきこ) さん

大阪市立大学医学部卒、広島大学大学院修了。京都府立医科大学附属病院眼科研修医、京都市立病院眼科医員等を経て、平成23年より姫路市のツカザキ病院眼科医員。眼科専門医、日本眼科学会、日本弱視斜視学会、日本眼科手術学会所属など。

<http://www.tsukazaki-hp.jp>



は正面を向いていて、もう片方が左右上下など違う方向を向いている状態。成長とともに脳の機能がカバーして、ものを見る時には困らないことも多いのですが、中には視力が悪くなる場合も。「斜視はメガネをかけて視線を調整するほか、必要なら手術療法を行います。ものを見る機能に困らなくても、手術ですれを目立たなくすることもできます」。斜視のタイプや年齢によって対処が異なるので、まずは小児眼科などの専門医に相談することが大切です。

また弱視は、視力が発達する時期に、何らかの理由で片目または両目に視覚情報を受け取ることができなかったため、視力の発達が遅れたり止まったりすることが原因。メガネや弱い方の目を使う練習で予防が可能な医学的弱視と、他の目の病気などで生じた回復困難な社会的弱視があります。

「子どもは、外からの視覚刺激を受け取ることで目に映った対象物を、脳が受け止める力を発達させます。視力機能の発達は2歳ごろがピークで、治療効果も早期発見、早期治療が大切です。小さな子どもの場合は、もともと見えにくい状況が当たり前なので、周囲の大人が日頃の子どもの行動や習慣に気をつけてください」。

3歳児健診や就学前健診は必ず受診し、精密検査が必要な場合は早めに専門医を受診してください。

《子どもの斜視とは…》

両目でものを見て立体感や距離感を感じ、見たものを脳で一つにまとめる《両眼視》の機能も子どものころに育つ。両眼視の発達は2歳ごろまでに成人の80%に達し、5歳までにほぼ完成すると言われる。この時期に左右の視線が常にずれていると機能が発達しない。

Q 斜視の主な原因は？

- ☐ 目の筋肉や神経などの異常
目を動かす筋肉や神経にわずかの異常があると目の位置がずれる。
- ☐ 遠視
遠視では強くピントを合わせないとはっきり見えないため、近くのものを見る時は目はかなり内側による（調整性内斜視）。
- ☐ 両眼視の異常
明らかな原因はないが両眼視がうまくできない場合。
- ☐ 視力不足
脳や全身の病気、ケガなどで片方の目が悪くなり、視力の悪い方の目が外斜視になることがある。

Q 目の位置による斜視のタイプは？

間欠性斜視

普段は正位の状態、時々片方の目が外側を向くのを間欠性斜視と言い、最も多い。視力や両眼視に問題は起きにくい、ぼーっとしたり目が疲れた時に視力が低下すると斜視になる。



内斜視

片方の目が内側を向いている状態

外斜視

片方の目が外側を向いている状態

上斜視

片方の目が上を向いている状態

下斜視

片方の目が下を向いている状態

※いずれも右目を正常な位置とした場合

《子どもの弱視とは…》

視覚感受性期に、視覚情報が伝わる経路のどこかに何らかの支障があると、はっきりとした対象物の映像が両眼に均等に送られず、映像を認識する脳の成長が不十分になって起こる。メガネをかけてもぼんやりとか見えない視力の低い弱視は、治療可能な子どもの目の病気の代表といえる。

Q 弱視にもタイプがあるの？

- ① 網膜に十分光が入らない状態（刺激遮断弱視）
生まれつき眼瞼（がんけん）下垂や角膜混濁、白内障などの病気で網膜に刺激が十分に入らず視力が十分に発達しない。
- ② 左右の目の屈折度の差が大きい（不同視弱視）
ピントが合いにくい、屈折度のずれの大きい方の目の視力が発達しにくい。
- ③ 網膜にピントが合わない（屈折異常弱視）
両目の強い遠視や乱視のため網膜にピントが合わず視力が発達しにくい。
- ④ 片方の目がずれている（斜視弱視）
片目の視線がずれていることで、その目が使われず視力が発達しにくい。

Q 家庭での弱視のみつけ方は？

- ☐ まぶたが開きにくいことがある
- ☐ 黒目が濁っている
- ☐ 目を細めてものを見ていることがある。見づらそうにしている
- ☐ テレビに異常に近づいて見ている
- ☐ ものにぶつかりやすい、転びやすい
- ☐ 目の前のものをつかみ損なう
- ☐ むりえ、お絵描きなど近くの作業をするとすぐ飽きてやめてしまう

